

慶應義塾大学湘南藤沢学会 研究助成金 成果報告書

慶應義塾大学 総合政策学部 4年 安田理紗

1：活動詳細

名称：2018年度人工知能学会全国大会（第32回）における研究発表
期間：2018年6月5日（火）～6月8日（金）
場所：鹿児島県鹿児島市（城山ホテル鹿児島）

2：活動目的および発表内容

本活動の目的は、人工知能学会全国大会において、「踊りにおける間合い～耳を澄ます、想い描く、つくりだす～」というタイトルの研究を発表し、フィードバックをいただくこと、また学会という場で発表することによる学びを得ることである。

「間合い」は自分の身体と周囲の環境との間で、誰もが日常生活の中で出会っている現象である。しかし、曖昧かつ暗黙的であるがゆえにほとんど研究されていないものである。

間合いは、踊りにも深く関係している。本研究は、第一筆者のコンテンポラリーダンスの実践を通して、間合いに関する側面を発見することを目的としたものである。その探究の中で顕在化した仮説を示す。

6ヶ月間同じ踊りを練習し、現在筆者が感じることのできる間合いは31パターン存在し、7種類の関係性の間に生まれている。それらは、「想いえがく」、「耳を澄ます」、「つくりだす」ことによって生み出されたと考えている。

また、認知構造にマップした結果以下のことが分かった。

- ・「耳を澄ます」ことは間合いを生み出す上での基盤である。
- ・「つくりだすこと」は身体が環境とインタラクションをする際の感覚と深い関係がある。
- ・「想いえがく」ことは上記2つが成立した暁に生じる高次なものごとである。

以上の本研究はあくまでも第一筆者の身体、経験、主観に基づくものであるが、ダンスにおける間合いの重要な側面を示唆する新しいものになったと考えている。従来の科学では重要視されてこなかった視点を含め、新しい仮説を発表することで、新しい試みを提供することを目標とする。

3：活動成果

6月8日最終日に開催された、オーガナイズドセッション「臨床の知」において、口頭発表を行った。多くの人に聞いていただき、無事に終えることができた。今回の発表により得ることのできた成果を以下に述べる。

まず、口頭発表である性質を生かし、発表方法を工夫することが一つの学びだった。15分という短い時間の中で、私の研究を始めて聞く人に対して、どこを伝えればより伝わり、興味を持ってもらえるかを考える良い機会になり、研究に対する理解が深まった。

また、人工知能学会らしいフィードバックに対して、的確に答える必要性を再認識できた。一人称研究に対する理解が少ないため、前提や大切にしている考え方をきちんと伝えることが求められた。一人称研究の意味を伝えることが、人工知能学会の場で伝えられる新規性のひとつであり、今回の発表の成果の一つであった。今回の発表では、間合いに関する「仮説」を示した。仮説が生まれたのなら次にどのように検証を行うのかという質問を発表後にいただいた。「検証」は、ある研究が多くの人にとっても同じ役割を果たすことを示すために行うものであると考えると、一人称研究においては必ずしも従来のような方法で求められるとは限らない。様々な研究発表を拝聴することも通して、「研究」とはこうであると考えている人が多いように感じた。従来の科学が大切にしてきた、普遍的、一般的であることは研究として必然であるという考え方が多くの人に根付いていることを改めて理解した。それを知ることができたのは、大きな成果であった。理解しているつもりでも、自分の詰めが甘かったことを認識できたため、良い経験になった。今後に活かしていきたいと思う。

4：今後の活動

研究発表を行ったことにより、私の研究の立ち位置、特色に自覚的になることができた。研究の中身はもちろん、どのような流れの上に自分の研究があるのかを知ることは、今後の私の学びに必要であることが分かった。他の研究と何が違い、何が共通しているのかを改めて知るために、近い他分野について学んでいきたい。

今回は認知構造の上での間合いの感じ方の傾向までを発表することができた。長期に渡って取り組んできた研究であるという特色を活かし、時期による傾向があるだろうというフィードバックを頂いた。また、踊りの種類や人数によっても感じることのできる間合いは異なってくる。今までの行ってきた方法で研究を深めるだけでなく、新しい視点を増やしなが、今後も踊りの探求を続けていく。

5：謝辞

この度の研究発表を行うにあたり、多くの方の助けを借りたことによって無事に終えることができました。助成金のご援助をいただいた慶應義塾大学湘南藤沢学会の皆さまに心よりお礼申し上げます。